

完全主義と対人関係に関する心理学的研究の展望

The Review of the Psychological Study on Perfectionism and Interpersonal Relationships

尾崎 直広

(東京成徳大学大学院)

市村 操一

(東京成徳大学)

Naohiro OZAKI (Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University)

Soichi ICHIMURA (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究は、完全主義が対人関係に及ぼす影響を検討したこれまでの研究をまとめたものである。完全主義の尺度の中でも、特に、Hewitt & Flett (1991) の完全主義尺度の下位尺度である、他者が自己に完全であることを求めていると認識する Socially Prescribed Perfectionism (SPP; 社会規定完全主義) は、下記のような人格特性との間に関連が報告されてきた。それは、対人不適応、対人苦惱、神経質傾向、妄想性人格障害、失調型人格障害、回避性人格障害、強迫性人格障害、依存性人格障害、受動-攻撃性人格障害、境界性人格障害、神経症的防衛スタイル、未成熟防衛スタイルなどである。SPP は、自己受容、及び自尊感情との間に負の相関があり、非合理的恐怖、及び他者からの評価懸念との間に正の相関がある。SPP との間に高い相関が認められている Concern Over Mistake (CM; ミスを過度に気にする傾向)、Doubt About Action (DA; 自分の行動に対する疑い)、Parental Criticism (PC; 両親の批判)、Parental Expectation (PE; 両親の期待) などの Frost et al. (1990) の完全主義の下位尺度は、自己開示の度合いを低め、自己隠蔽の度合いを高める。SPP は、回避的対処行動を強め、先延ばし行動を増加させる。

また、SPP は、2つの下位尺度で構成される。1つは他者の高い基準 (OHS; Others' High Standard) と、もう1つは他者による条件付受容 (CA; Conditional Acceptance) である。条件付受容のみが心理的諸問題との間に関連がある。

これらの結果から今後の課題と展望を議論した。

キーワード：完全主義、回避傾向、先延ばし、被援助志向性、自尊感情

3つの多次元完全主義尺度の開発

一般的に、完全主義は、精神的、身体的、心理的に最適の現在や将来の状態を獲得しようとする意志と定義される。完全主義の心理学的研究は、

1990年代に飛躍的に増大した。それは、大きく分けて3つの主要な研究グループがそれぞれの定義によって尺度を開発し研究を進めたことに起因する。それらの研究グループは、①Frostを中心としたグループ、②HewittやFlettを中心とした

グループ、③Slaney や Ashby を中心としたグループである。本研究では、これらの研究グループがカナダやアメリカを中心として行った、完全主義が対人関係に及ぼす影響の先行研究の検討と今後の展望を考察する。まず、1990年代から2000年代にかけて開発された3つの主要な尺度について簡単に説明することにする。

①Frost et al. (1990) は、Burns (1980) の Burns Perfectionism Scale や Garner et al. (1983) の Eating Disorder Inventory の下位尺度を参考にして、6つの次元の完全主義尺度 (MPS-F) を開発している。その構成は Concern Over Mistake (CM; ミスを過度に気にする傾向)、Organization (O; 秩序正しさを重んじる傾向)、Personal Standard (PS; 自分に高い目標を課す傾向)、Doubt About Action (DA; 自分の行動に対する疑い)、Parental Criticism (PC; 両親の批判)、Parental Expectation (PE; 両親の期待) の6つの次元の下位尺度から成る。

②Hewitt & Flett (1991) は、完全主義の個人的側面に加えて、対人関係的側面や社会的側面を測定する3次元の完全主義尺度 (MPS-HF) を開発した。これは自己に対する完全主義傾向を測定する Self Oriented Perfectionism (SOP; 自己志向完全主義)、他者に対する完全主義傾向を測定する Other Oriented Perfectionism (OOP; 他者志向完全主義)、他者が自己に完全であることを求めていると認識する Socially Prescribed Perfectionism (SPP; 社会規定完全主義) から構成されている。

③Slaney et al. (2001) は Slaney et al. (1992) において作成された Almost Perfect Scale (APS) に、これまでの完全主義尺度の問題点の再検討と質的研究の結果に基づいた改編を加え、Almost Perfect Scale Revised を開発した。下位尺度は、自身に課す基準と実際の行為との不一致である Discrepancy (D; 不一致)、High Standard (HS; 高い基準) Order (O;

規律性) の3つの下位尺度から成る。

これら3つの研究グループによってそれぞれに完全主義の尺度が開発され、それらの完全主義尺度とさまざまな心理的諸問題の関係が研究されてきた。その心理的諸問題の中には、ネガティブな問題だけではなくポジティブな側面も含まれている。最近では、それぞれの尺度を組み合わせた研究 (Aldea & Rice, 2006; Wei et al., 2004; Dunkley & Blankstein et al., 2000; Dunkley et al., 2003) も多く見られる。本論では、先にあげた3つの尺度で測定される完全主義が対人関係に及ぼす影響に注目し、特に対人関係における回避傾向に及ぼす影響の先行研究を検討する。それにあたって、これらの完全主義の尺度をもとにした完全主義と対人関係の関連を研究した近年の成果を次のようなカテゴリーに要約した。以下、それぞれ概観していくことにする。

1. 完全主義とパーソナリティ傾向
2. 完全主義と自己受容、及び自尊感情
3. 社会規定完全主義を構成する他者による条件付受容と他者の高い基準
4. 完全主義と非合理的恐怖、評価懸念
5. 完全主義と自己開示、及び自己隠蔽
6. 完全主義と回避的対処行動、及び先延ばし

1. 完全主義とパーソナリティ傾向

Hill & McIntire et al. (1997) は完全主義の各タイプと対人関係を測定する2つの尺度を調べた。一方は、適応に関する8つの下位尺度を含む対人適応尺度 (Interpersonal Adjective Scale-Revised; Wiggins et al., 1988)、一方は対人問題に関する8つの下位尺度を含む対人問題インベントリー (Inventory of Interpersonal Problems; Horowitz, 1990) である。この研究では、多次元完全主義尺度 (MPS-HF) と対人適応尺度、及び対人問題インベントリーとの相関関係が正準相関係数を使って調べられた。MPS-HF の

SOP（自己志向完全主義）の高い人は、男女ともに、対人関係において適応的であり、自己確信的で主張的な傾向がある。それに加えて SOP の高い女性は、情緒的で面倒見がよく外向的な傾向が示された。SOP の高い人はこのような適応的な側面が優勢である一方で、男性においては、心理的距離をおきやすく、支配的で容易に人を信じないといった対人的な問題があり、女性は、過度に世話をしすぎるといった対人的な問題があった。

OOP（他者志向完全主義）の高い人は、男女ともに、横柄で支配的な傾向があり、容易に人を信じるのがなく、社会的な距離をおく傾向があるが、対人的な問題はなかった。SPP（社会規定完全主義）の高い男性は、横柄で社会的な距離をおくことなどの対人関係における不適応な傾向があり、SPP の高い女性は数多くの対人問題と対人関係における苦悩を抱えていることが示された。

簡単にまとめると、SOP の高い女性は、対人関係において比較的ポジティブに働く傾向があるが、OOP の高い男女はともに対人関係において支配的な傾向があること、SPP の高い男女は、ともに数多くの対人的な苦痛を抱える傾向があることから、対人的に不適応な傾向があることが示された。

これらの傾向は、Hill & Zrull et al. (1997) の研究ともほぼ一致している。この研究においては、MPS-HF の完全主義と Big-Five (NEO-PI-R) との関連が調べられ、SOP は、真面目さ (Conscientiousness) の各下位尺度との間に強い相関を、OOP は、調和性 (Agreeable) の各下位尺度と中程度の負の相関を、SPP は、神経質傾向 (Neuroticism) との間に正の相関を示した。

また、完全主義と対人関係に支障をきたす人格障害との関連も研究され、完全主義尺度と MMPI-PDS (Morey, Waugh, & Blashfield, 1985)、及び MCMI (Millon, 1983) との関連が調べられた。MMPI-PDS (Morey, Waugh, & Blashfield, 1985) と MCMI (Millon, 1983) の

尺度による違いがみられるものの、Hill & McIntire et al. (1997) や Hill & Zrull et al. (1997) の結果とほぼ同じように、SOP は人格障害との関連がほとんど認められず、OOP、及び SPP と人格障害との間に関連がみられた。以下、その詳細を示すと、Hewitt & Flett et al. (1992) が、DSM の人格障害の分類に従って開発されたミネソタ多面人格目録 (MMPI) の人格障害スケール (MMPI-PDS; Morey, Waugh, & Blashfield, 1985) と MPS-HF (1991) との間の関連を調べたところ、次のような結果が確かめられた。SOP は、受動-攻撃性人格障害 ($r = -.24, p < .01$) との間に弱い負の相関があり、OOP は B 群パーソナリティ障害の自己愛性人格障害 ($r = .33, p < .01$) との間に正の相関があり、SPP は A 群パーソナリティ障害の妄想性人格障害 ($r = .55, p < .001$)、失調型人格障害 ($r = .47, p < .001$)、C 群パーソナリティ障害の回避性人格障害 ($r = .34, p < .01$)、強迫性人格障害 ($r = .26, p < .01$)、依存性人格障害 ($r = .39, p < .001$)、受動-攻撃性人格障害、($r = .39, p < .001$) などとの間に相関があった。

Hewitt et al. (1991) が、精神科の患者 77 人を対象に MPS-HF とミロン多軸人格目録 (MCMI; Millon, 1983) の関連を調べたところ、SOP では基本的パーソナリティ及び病理的パーソナリティ障害との間に相関は見られなかった。OOP では演技性 ($r = .24, p < .01$)、自己愛性 ($r = .31, p < .01$)、反社会性 ($r = .29, p < .01$) の基本的パーソナリティパターンの下位尺度との間に正の相関がみられ、SPP では失調型人格障害 ($r = .27, p < .05$) や境界性 ($r = .49, p < .01$) の病理的パーソナリティ障害との間に正の相関を示し、基本的パーソナリティパターンでは、シゾイド ($r = .33, p < .01$)、回避性 ($r = .38, p < .01$)、受動-攻撃性 ($r = .40, p < .01$) などとの下位尺度の間に関連を示した。この結果は、Hewitt & Flett et al. (1992) の MMPI-PDS との結果と異なる。

MMPI-PDS では、境界性人格障害の下位尺度と SPP に関連が見られなかったのに対して、MCMI では強い関連が見られたこと以外は、概ね一致した結果を得ている。これを受けて、Hewitt et al. (1994) は、境界性人格障害の患者と統制群に MPS-HF を実施し、境界性人格障害の患者は統制群に比べて SPP 得点が有意に高いことを報告している。

また、Flett (2005) の研究では、SPP と理想化、受動的攻撃、偽利他性、反動形成、打ち消しなどの神経症的防衛スタイルや、行動化、自閉的空想、投影、身体化、分離、否定などの未成熟防衛スタイルとの関連が指摘されており、さらにこれらの神経症的防衛スタイルと未成熟防衛スタイルの二つの不適応的防衛スタイルは、抑うつの中介変数であることも報告されている。

これらの対人関係における適応、対人問題、パーソナリティ傾向、人格障害などと完全主義の関連を調べた研究の結果から、SPP と OOP が対人関係に負の影響を及ぼしていると考えられる。特に、SPP の影響は大きいと考えられる。このことは、対人関係場面に限定しなくとも、SPP が抑うつ (Hewitt et al., 1991; Preusser & Rice, 1994)、摂食障害 (Vohs et al., 1999; Vohs et al., 2000)、自殺念慮 (Hewitt et al., 1992; Hewitt et al., 1997; Hunter & O'Connor, 2003) との間に大きな関連を有することが認められることから推測できる。しかし、日本における完全主義の研究は、SOP の肯定的側面と否定的側面を検討する研究が多く (桜井 et al., 1997; 伊藤, 2002; 大谷, 2004; 伊藤, 2004; 小堀 et al., 2004; 石田, 2005; 伊藤 et al., 2005)、SPP に対する関心はこれまであまり持たれてこなかった。

次に、この SPP を中心に、完全主義傾向の高い人がどのような自己概念をもっているかを把握するために、完全主義と自己受容、及び自尊感情との関連を調べた研究を概観する。

2. 完全主義と自己受容、及び自尊感情

Flett et al. (2003) は、無条件の自己受容と SOP (自己志向完全主義)、OOP (他者志向完全主義)、SPP (社会規定完全主義) の完全主義の各タイプとの関連を調べたところ、どのタイプの完全主義も無条件の自己受容との間に負の関連があることを発見した。特に、SPP は自己受容との間にやや強い負の相関 ($r = -.47, p < .001$) があった。また、この研究では、無条件の自己受容が、SPP と抑うつの仲介変数になるという結果が示されている。

さらに、Flett et al. (1991) は、SPP と自尊感情との間にも、負の相関 ($r = -.26, p < .05$) を発見した。Preusser & Rice (1994) は、SPP と自尊感情との間に、男性 ($r = -.33, p < .05$)、女性 ($r = -.44, p < .05$) とともに負の相関を確認し、自尊感情が抑うつとの間の仲介変数となる結果を得ている。同じ様に、Klibert, Rohling & Saito (2005) の研究においても、SPP と自尊感情との間の関係が調べられ、両者の間に負の相関が得られた ($r = -.27, p < .01$)。

完全主義と自尊感情との負の相関は Frost et al. (1990) の 6 次元の完全主義である MPS-F や Slaney et al. (2001) の APS-R の間にも完全主義と自尊感情の間にも確認された。Gotwals & Dunn (2003) は、大学生のスポーツ選手に対して Frost et al. (1990) の完全主義 (MPS-F) 尺度と自尊感情との間の関連を調べた。その結果、CM (ミスに過度に気にする傾向) ($r = -.43, p < .001$)、DA (自分の行動に対する疑い) ($r = -.58, p < .001$)、PC (両親の批判) ($r = -.30, p < .01$) などと自尊感情との間に負の相関が見られた。Ashby & Rice (2002) の研究では、APS-R の下位尺度である D (不一致) と自尊感情との間の関連が指摘されている。

以上のように、完全主義の中でも、特に SPP (社会規定完全主義) が自尊感情、及び自己受容との間に負の相関があるという報告がなされてい

る。このことから、SPPの高い人は他者が自己に完全を求めていると認識し、その完全主義的な要求を満たすことができない自己への受容感や尊敬感を持っていない状態であり、貧弱な自己概念を抱えていると考えることができる。言い換えれば、他者から課せられた完全主義的な要求や理想と現実の自己との不一致に苦悩していると考えられる。

3. 社会規定完全主義を構成する他者による条件付受容と他者の高い基準

Campbell & Di Paula (2002) は、SPP (社会規定完全主義) を詳細に検討している。彼らは、SPPが高い基準を満たさなければ他者に愛されずに受け入れられないという条件付受容 (CA; Conditional Acceptance) と、他者が自己に完全を求めていると認識する他者の高い基準 (OHS; Others' High Standards) の二つの下位尺度に分かれることを指摘している。興味深いことに、彼らの研究では、CAとBDI (Beck, 1967) によって測定された抑うつ ($r = .40, p < .001$)、及び縮小版 Big-Five の神経症性格 ($r = .43, p < .001$) との間に正の相関が確かめられたが、OHSと抑うつ、及び神経症性格との間には全く相関は確かめられなかった。

さらに彼らの研究では、CAと自尊感情 (Rosenberg, 1965) との間に負の相関 ($r = -.54, p < .001$) があることや、CAと縮小版 Big Five (Costa & McCrea, 1989) の調和性、外向性、真面目、開放性との間に、それぞれ負の相関があることが示されたが、OHSと調和性との間に負の相関があった以外は、OHSと外向性、真面目、開放性との間に相関は示されなかった。つまり、この結果では、OHSではなくCAが、抑うつや自尊感情の低さなどの心理的不適応との間に関連があることが示された。

この結果について、Lundh (2004) は、他者が自己に高い基準を課しているという認識によるだけでなく、その求められた基準を満たすこと

ができない自己を受容できない場合に、SPPが心理的不適応を引き起こすことを指摘している。つまり、他者から高い基準を課せられていると認識し、さらに、他者の高い基準を満たせていない自己を受容できずに、また、そういった自己を他者からも受容されていないと認識している場合や、そういった自己に対する尊敬を感じることができない場合に、SPPが心理的不適応を導くと考えられる。

OHSと抑うつや自尊感情の低さなどとの関連が認められなかったのは、OHSの項目が他者の求める高い基準を認識しているかどうかを測定しているだけで、それを満たしていない自己を受容できているか、また、その基準を満たさなければ他者から受容されないと考えているか、さらに、そういった自己に自尊感情を抱いているかについては測定されていないからであろう。一方のCAの項目は、他者から求められた基準を満たさなければ、他者に受容されないということを測定している。

以上のことから、先に示した研究 (Flett et al., 2003; Preusser & Rice, 1994; Klibert, Rohling & Saito, 2005) では、SPPの下位尺度であるCAとOHSとの相関は示されていないが、Campbell & Di Paula (2002) の指摘のように、OHSではなくCAと自己受容、及び自尊感情との間に負の相関が予測される。

4. 完全主義と非合理的恐怖、及び評価懸念

Flett et al. (1991)、Preusser & Rice (1994)、Flett et al. (2002)、Klibert, Rohling & Saito (2005) の研究では、SPPと無条件の自己受容や自尊感情との間に負の相関が示された。この結果から、他者の求める高い基準や理想と、それを満たすことのできない自己との間の不一致が起こっていることが考えられる。そこには、貧弱な自己概念が想定される。その貧弱な自己概念のさらなる低下を恐れるために、完全主義傾向の

高い人は、評価懸念 (Fear of Negative Evaluation) や非合理的な恐怖 (Irrational fear) を抱くことになるかと推測することができる。

Flett et al. (1991) は、SOP (自己志向完全主義)、OOP (他者志向完全主義)、SPP (社会規定完全主義) の MPS-HF の完全主義の各タイプと評価懸念 (Leary, 1983) との関連を研究している。彼らは、SPP と評価懸念との間に正の相関 ($r=.46, p<.05$) を見だし、Flett et al. (1996) においても、SPP と評価懸念との間に相関 ($r=.25, p<.05$) が示されている。さらに、この研究では、SPP が社会的な自尊感情との間に負の相関 ($r=-.21, p<.05$)、孤独との間に正の相関 ($r=.37, p<.05$)、恥じらいとの間に正の相関 ($r=.28, p<.05$) があることが報告されている。

同じ様に、Blankstein et al. (1993) は、SOP (自己志向完全主義)、OOP (他者志向完全主義)、SPP (社会規定完全主義) の完全主義の各タイプと、非合理的恐怖 (Wolpe & Lang, 1964) の関連の研究を行っている。その研究では、SPP が非合理的恐怖の次のような側面と有意な相関関係があることが示された。失敗 ($r=.22, p<.001$)、ミスをする事 ($r=.31, p<.001$)、コントロール不全に陥ること ($r=.23, p<.05$)、怒りを感じる事 ($r=.18, p<.05$)、批判される事 ($r=.21, p<.01$)、間の抜けた顔をしている事 ($r=.20, p<.05$)、権威的な人 ($r=.20, p<.05$) などである。

以上のように、MPS-HF の SPP (社会規定完全主義)、MPS-F の CM (ミスに過度に気にする傾向)、DA (自分の行動に対する疑い)、PC (両親の批判)、APS-R の D (不一致) は、自己受容もしくは自尊感情との間に負の相関が指摘されており、SPP は非合理的恐怖、及び評価懸念との関連が指摘されている。この結果から、完全主義傾向の高い人は、無条件の自己受容や自尊感情が低く、自己概念が貧弱であることが想定され、そういった自己概念のさらなる低下を恐れるために、

評価懸念や非合理的恐怖を抱くことになるかと考えられる。そしてこれらの恐れは、自己開示を妨げたり、自己隠蔽を促進したりすることに繋がる。次に、完全主義と自己開示、及び自己隠蔽との関連を検討した研究を概観する。

5. 完全主義と自己開示、及び自己隠蔽

Habke (2002) は、完全主義が高く、自己受容や自尊感情が低く、評価懸念や非合理的恐怖などがある場合に、自己隠蔽 (Self-Concealment; Larson & Chastain, 1990) が高まることや、自己開示 (Self-Disclosure) が妨げられ、それが対人関係における回避傾向を生み出すことを指摘している。Kawamura et al. (2004) の研究では、SPP との高い相関が認められている (Enn & Cox, 2002) CM、DA、PC、PA の完全主義と家族や友人に対する自己開示 (Willingness to Disclose to Family and Friend; 以下、DISFAM and DISFRI) との間に負の相関 (DISFAM $r=-.43, p<.002$, DISFRI $r=-.37, p<.002$) があり、CM、DA、PC、PA の完全主義と自己隠蔽との間にも正の相関 ($r=-.61, p<.002$) があるという結果が報告されている。

Habke (2002) や Kawamura et al. (2004) の研究では、完全主義が自己開示、及び自己隠蔽などの対人関係における回避傾向との間に関連があることが示されている。しかし、この回避傾向は、先の Hewitt & Flett et al. (1992) の SPP と回避性人格障害との関連からも推測されることである。

6. 完全主義と回避的対処行動、及び先延ばし

Dunkley et al. (2000)、Dunkley et al. (2003) や Frost (1990)、Stober (2001)、Saddler (1993) の研究は、Kawamura et al. (2004) の完全主義と自己開示の低さ、及び自己隠蔽の高さなどの対人関係における回避傾向との関連ではなく、回避的対処行動や先延ばしなどの問題解決場面や課

題遂行場面における回避傾向と完全主義との関連を指摘している。Dunkley et al. (2000) や Dunkley et al. (2003) は、回避的対処行動が DA (行為への疑い)、CM (過度にミスに気にする傾向)、SPP (社会規定完全主義)、Blatt et al. (1976) の Self Criticism Perfectionism (SCP; 自己批判的完全主義) と不安や抑うつなどの心理的苦悩との間の仲介変数になることを指摘している。

Frost (1990)、Stober (2001)、Saddler (1993) は、完全主義と先延ばし (Procrastination) との関連を指摘している。この先延ばしは、対人関係の視点に立つと回避傾向を示すと考えることができる。(例、教授が学生に課題を出しても、学生が課題をやってこない、授業に出てこない、学校に来ない。)。Frost et al. (1990) や Stober et al. (2001) の研究では、MPS-F と先延ばしの関連が調べられ、CM、DA、PA、PC の完全主義と先延ばしとの間に関連が示されている。Saddler (1993) の研究では、MPS-HF と先延ばしの関連が調べられ、SPP と先延ばしとの間に正の相関が示されている。これらの結果を受けて、Kristie & Speirs (2004) は、SOP (自己志向完全主義) の得点の高いグループと SPP の得点の高いグループに半構造化面接を実施し質的研究を行った。彼らは、Frost et al. (1990) や Stober et al. (2001) の研究と同じように、SPP 得点の高いグループにおいて先延ばし傾向が高いことを報告している。また、Hobden (1995) は、先延ばしの類似概念として知られる、セルフ・ハンディキャッピングと SPP との間に関連があることを確かめている。

完全主義と対人関係の関連の再検討と今後の展望

3つの研究グループの完全主義尺度の違いに関わらず、SPP (社会規定完全主義)、CM (ミスを過度に気にする)、DA (行為への疑い)、D (不一致) などの完全主義と自尊感情、及び自己

受容との間に負の相関が発見されている。これらの完全主義傾向の高い人は、完全主義が引き起こす誰も満たすことのできない基準と、それを満たす事ができない貧弱な自己概念との不一致に苦悩していると考えられる。そして、そういった貧弱な自己へのさらなる評価懸念が、対人関係における回避傾向を生んでいると考えられる。

これまで概観してきたように、日本において注目されてこなかった SPP (社会規定完全主義) は、カナダやアメリカを中心とした研究では、心理的不適応にもっとも関係しているという報告が多数なされている。SPP は他の完全主義の尺度と比較すると、他者が自己に完全を求めているという点で、対人関係を意識している側面が含まれていることが特徴的である。河合 (1997) が指摘するように、「個」の倫理が優勢であるカナダやアメリカとは異なり、日本には「場」の倫理が優勢であり、常に対人関係を意識せざるを得ない文化的特性がある。完全主義の研究において、この文化的特性を考慮すると、日本はカナダやアメリカよりも、対人関係を意識する側面が含まれている SPP が心理的な問題に大きな影響を及ぼしている可能性が考えられる。それは対人問題における完全主義の影響に限ったことではない。

さらに、この場を借りて日本における完全主義研究の今後の課題を述べると、Slaney et al. (2001) によって作成された APS-R の作成が求められることと、SPP の CA (条件付受容) に焦点を当てた研究が今後の1つの課題となることを指摘しておきたい。

なぜなら、APS-R の D (不一致) は、完全主義的な基準を自己が設定したものである一方で、SPP の CA は、他者から設定された完全主義的な基準であるという違いはあるものの、完全主義的な理想的自己とそれを満たせない自己との不一致に完全主義傾向の高い人が苦悩しているという点では同じであるからである。従って、この D と CA が非機能的な完全主義を最も適切に測定し

ていると考えられる。

まとめ

これまで概観したことを下記に簡単にまとめる。今後は、これらの研究の結果を基にしたさらなる研究が期待される。

1. 社会規定完全主義は、対人不適応、対人苦悩、神経質傾向、妄想性人格障害、失調型人格障害、回避性人格障害、強迫性人格障害、依存性人格障害、受動-攻撃性人格障害、境界性人格障害、神経症的防衛スタイル、未成熟防衛スタイルなどとの間に正の相関がある。
2. 社会規定完全主義は、自己受容、及び自尊心との間に負の相関がある。
3. 社会規定完全主義を、他者による条件付受容と他者の高い基準で構成され、条件付受容が心理的諸問題との間に関連がある。
4. 社会規定完全主義は、非合理的恐怖、及び評価懸念との間に正の相関がある。
5. 完全主義は、自己開示、及び自己隠蔽との間に関連がある。
6. 社会規定完全主義は、回避的対処行動、及び先延ばしとの間に関連がある。

<引用文献>

Aldea M. A., Rice K. G. 2006 The role of Emotional Dysregulation in Perfectionism and Psychological Distress. *Journal of Counseling Psychology*, 53(4), 498-510.

Ashby, J. S., & Rice, K. G. 2002 Perfectionism, Disfunctional Attitudes, and Self-Esteem: A Structural Equations Analysis. *Journal of Counseling Development*, 80, 2, 197-203.

Beck., A. T. (1967). *Depression: Clinical, and theoretical aspects*. New York: Harper & Row.

Blatt, S. J., D'Afflitti, J. P., & Quinlan, D. M. (1976). Experiences of depression in normal

young adults. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 388-397.

Burns D. D. 1980 The Perfectionist's Script for Self-Defeat. *Psychology Today*, November, 38-53.

Blankstein, K. R., Flett G. L., Hewitt. P. L., & Enga, A. 1993 Dimensions of perfectionism and irrational fears: an examination with the fear survey schedule. *Personality and Individual Differences*, 15(3), 323-328.

Campbell & Di Paula 2002 Perfectionistic Self-Beliefs: Their Relation to Personality and Goal Pursuit. In Hewitt, P. L. & Flett. G. L. (Eds) *Perfectionism. Theory, Research, and Treatment*. Washington, DC: American Psychological Association.

Dunkley, D. M., Zuroff, D. C., & Blankstein, K. R. 2003 Self-critical perfectionism and daily affect: dispositional and situational influences on stress and coping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84(1), 234-252.

Dunkley, D. M., Blankstein, K. R., & Halsall, J., Williams, M., & Winkworth, G. 2000 The relation between perfectionism and distress: Hassles, coping, and perceived social support as mediators and moderators. *Journal of Counseling Psychology*, 47, 437-457.

Enns, M. W. & Cox, B. J. 2002 Interpersonal Aspects of Trait of Perfectionism. In Hewitt, P. L. & Flett. G. L. (Eds). *Perfectionism. Theory, Research, and Treatment*. Washington, DC: American Psychological Association.

Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankstein, K. R., & O'Brien, S. 1991 Perfectionism and learned resourcefulness in depression and self-esteem. *Journal of Personality and Individual Differences*, 12, 61-68.

Flett, G. L., Besser, A., & Hewitt, P. L. 2005 Perfectionism, Ego Defense Styles, and Depression: A Comparison of Self-Reports Versus Informant Ratings. *Journal of Personality*, 73, 5,

- 1355-1396.
- Flett, G. L. & Hewitt, P. L. 2001 Perfectionism and Maladjustment: An Overview of Theoretical, Definitional, and Treatment Issues. In Hewitt, P. L. & Flett, G. L. (Eds) *Perfectionism. Theory, Research, and Treatment*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Flett, G. L., Besser A., Davis R. A. & Hewitt P. L. 2003 Dimensions of Perfectionism, Unconditional Self-Acceptance, and Depression. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, 21(2), 119-138.
- Frost, R. O., Marten, P. Lahart, C., & Rosenblate, R. 1990 The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449-468.
- Frost, R. O et al. 1990 The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449-468.
- Garner, D. M., Olmstead, M. P., & Polivy, J. 1983 Development and validation of a multidimensional eating disorder inventory for anorexia nervosa and bulimia. *International Journal of Eating Disorders*, 2, 15-34.
- Gotwals, J. K., & Dunn, J. G. H. 2003 An Examination of Perfectionism and Self-Esteem in Intercollegiate Athletes. *Journal of Sports Behavior*, 26, 1, 17-38.
- Habke, A. M. & Flynn, C. A. 2002 Interpersonal Aspects of Trait of Perfectionism. In Hewitt, P. L. & Flett, G. L. (Eds). *Perfectionism. Theory, Research, and Treatment*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Hewitt, P. L. & Dyck, G. 1986 Perfectionism, stress, and vulnerability to depression. *Cognitive Therapy and Research*. 10, 137-142.
- Hewitt, P. L. & Flett G.L. 1991 Perfectionism in the Self and Social Contexts: Conceptualization, Assessment, and Association With Psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*. 60, 3, 456-470.
- Hewitt, P. L. & Flett G.L. Dimensions of Perfectionism in Unipolar Depression 1991 *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 1, 98-101.
- Hewitt, P. L., Flett G. L & Turnbull-Dnovan, W. Perfectionism and multiphasic personality inventory (MMPI) indices of personality disorder 1992 *Journal of pathology and Behavioral Assessment* 14, 4, 323-335.
- Hewitt, P. L., Flett, G. L. & Turnbull-Dnovan, W. Perfectionism and suicide potential 1992 *British Journal of Clinical Psychology* 31, 181-190.
- Hewitt, P. L., Newton J. & Flett, G. L. Callander L. 1997 Perfectionism and suicide ideation in adolescent psychiatric patients. *Journal of Abnormal Child Psychology*. 25(2), 95-101.
- Hill, R. W., Zrull M. C., Turlington, S. 1997 Perfectionism and Interpersonal Problems. *Journal of Personality Assessment*. 69, 81-103.
- Hill, R. W., McIntire, K., & Bacharach, V. 1997 Perfectionism and the Big Five Factors. *Journal of Social Behavior and Personality*. 12., 257-270.
- Hobden, K. P. 1995 Self-Handicapping and Dimensions of Perfectionism: Self-Presentation vs Self-Protection. *Journal of Research in Personality*. 29, 4, 461-474.
- Horowitz, L. M., Rosenberg, S. E., Baer, B. A., Ureno, G. E., & Villasenor, V. S. (1988). Inventory of Interpersonal Problems: Psychometric properties and clinical applications. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 56, 885-892.
- Hunter, E. C. & O'Connor, R. C. 2003 Hopelessness and future thinking in parasuicide: The role of perfectionism. *British Journal of Clinical Psychology*, 42(4), 355-365.
- 伊藤拓・上里一郎 2002 完全主義およびネガティブな反すうとうつ状態の関連性 - 抑うつの脆弱要因としての完全主義についての再検討 - カウンセリング研究, 35, 185-197.
- 伊藤拓・竹中晃二・上里一郎 2005 抑うつの心理的要因の共通要素 - 完全主義, 執着性格, 非機能的態度と

- うつ状態の関連性におけるネガティブな反すうの位置づけ - 教育心理学研究, 53, 2, 162-17.
- 伊藤菜穂子 2004 不適切な動機による完全主義が心理的不適応に及ぼす影響 心理臨床学研究 22, 5, 542-551.
- 河合隼雄 1997 母性社会日本の病理 講談社 + α 文庫
- Kawamura, K. Y. & Frost R. O. (2004). Self-Concealment as a Mediator in the Relationship Between Perfectionism and Psychological Distress. *Journal Cognitive Therapy and Research*, 28(2), 183-191.
- Klibert, J. J., Langhinrichsen-Rohling, J., & Ssaito, M 2005 Adaptive and Maladaptive Aspects of Self-Oriented versus Socially Prescribed Perfectionism. *Journal of College Student Development*, 46, 2.
- Kristie, L. & Speirs N. 2004 Understanding the relationship Between Perfectionism and Achievement Motivation in Gifted College Students. *Gifted Child Quarterly*, 48(3), 219-231
- 小堀修・丹野義彦 2004 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み パーソナリティ研究, 13, 1, 34-43.
- Lundh, L. G. 2004 Perfectionism and Acceptance. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, 22(4), 251-265.
- Leary, M. R. 1983 Social Anxiousness: the construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment* 47, 66-75.
- Larson, D. G. & Chastain, R. L. 1990 Self-concealment: Conceptualization measurement and health implications. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 439-455.
- Millon, T. 1983 Millon Clinical Multiaxial Inventory Manual, Interpretive Scoring Systems, Minneapolis, Minnesota.
- Morey., L. C., Waugh, M. H., Blashfield, R. K. 1985 MMPI scales for DSM-III disorders: Their derivation and correlates. *Journal of Personality Assessment*, 49, 245-251.
- 大谷保和 2004 自己志向の完全主義の2側面と自己評価の抑うつ傾向の関連の検討 - 統制不可能事態への対処を媒介として 心理学研究 75, 3 199-206.
- Preusser, K. J, Kenneth G. R. & Jeffrey S. A. 1994 The Role of Self-Esteem in Mediating the Perfectionism-Depression Connection. *Journal of College Student Development*, 35, 2, 88-93
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Saddler, C. D., & L.A. Sacks. 1993 Multi-dimensional perfectionism and academic procrastination: Relationships with depression in university students. *Psychological Reports*, 73, 863-87.
- Slaney, R. B., Rice, K. G., Mobley, M., Trippi, J., & Ashby, J. 2001 The revised almost perfect scale. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, 34(3), 130-145.
- Slaney, R. B., Rice, K. G., Mobley, M., Trippi, J., & Ashby, J. 2001 A Programmatic Approach to Measuring Perfectionism: The Almost Perfect Scales. In Hewitt, P. L. & Flett. G. L. (Eds) *Perfectionism. Theory, Research, and Treatment*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Stober, J. & Joormann, J. 2001 Worry, Procrastination, and Perfectionism: Differentiating Amount of Worry, Pathological Worry, Anxiety, and Depression. *Cognitive Therapy and Research*, 25, 49-60.
- 桜井茂男・大谷佳子 1997 自己に求める完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係 *Japanese Journal of Psychology*, 68, 3, 179-186.
- Wei, M., Mallinckrodt, B., Russell, D. & Abraham, T. 2004 Maladaptive perfectionism as a mediator and moderator between attachment and depressive mood. *Journal of Counseling Psychology*, 51, 201-212.

- Wiggins, J. S., Trapnell, P., & Phillips, N. 1988
P-sychometric and Geometric Characteristics of
the Revised. Interpersonal Adjective Scales (IAS-
R). *Multivariate Behavioral Research*, 23, 517-
530.
- Vohs, K. D., Bardone, A. M., Joiner, T. E., Jr.,
Abramson, L. Y., & Heatherton, T. F. 1999
Perfectionism, perceived weight status, and self-
esteem interact to predict bulimic symptoms: A
model of bulimic symptom development. *Journal
of Abnormal Psychology*, 108, 695-700.
- Vohs, K. D., Voelz, Z. R., Pettit, J. W., Bardone,
A. M., Katz, J., Abramson, L. Y., Heatherton,
T. F., & Joiner, T. E. 2001 Perfectionism, Body
Dissatisfaction, And Self-esteem: An Interactive
Model of Bulimic Symptom Development.
Journal of Social and Clinical Psychology, 20, 4,
476-497.

謝辞

本論文をまとめるにあたり、校正を手伝って頂
きました東京成徳大学大学院の長澤里美さんに深
く感謝いたします。